

# 2018FIFA ワールドカップロシア 日本代表チームにおけるメディカルサポート

久保田 武晴 (神奈川県 くぼたスポーツ接骨院)

Key words : 2018FIFA World Cup Russia National team Medical staff

## 【目的】

ラグビーワールドカップ 2019 日本大会、2020 東京オリンピック・パラリンピックを控えスポーツが近年より注目されている中、柔道整復師がトップレベルでのスポーツの現場での活躍する機会も増加してゆくと思われる。2018FIFA ワールドカップロシア大会にメディカルスタッフとして参加し、本大会に向けてのコンディショニングおよび傷病からの競技復帰に立ち会った一症例を報告することを目的とする。

## 【方法】

対象はロシアワールドカップに向けて召集されたサッカー日本代表選手 30 名、本大会では 23 名であった。期間は本大会前の事前キャンプから本大会終了までの 47 日間であった。メディカルスタッフは整形外科ドクター 1 名、内科ドクター 1 名、アスレティックトレーナー 4 名で構成された。アスレティックトレーナーは鍼灸あん摩マッサージ師 3 名、柔道整復師および鍼灸あん摩マッサージ師 1 名の資格を有し、全員が日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーであった。キャンプ立ち上げ時またキャンプ中の検査測定項目として、ドクターによるメディカルチェック、身長・体重・体脂肪率、心電図、心エコー、CK(クレアチンキナーゼ)、唾液(コルチゾール)、ヨーヨーテスト、AT(無酸素性作業閾値)トレッドミル(JISS)、起床時心拍数(SPO2計測器)、ワンタップアプリを使ったセルフチェックを行った。またリカバリー的手段として、有酸素運動、ストレッチ、プール、アイスバス、交代浴、サウナ、クライオセラピー、トレーナーによるマッサージを行った。

## 【結果】

事前キャンプ開始時点での持ち込み外傷は大腿部外傷性血腫 1 件、膝内側側副靭帯損傷 1 件、足関節内側側副靭帯損傷 1 件であった。大会期間中に発生した内科的疾患は皮膚疾患 10 名、消化器疾患 9 名、睡眠障害 8 名、呼吸器疾患 6 名、口唇ヘルペス 2 名、耳鼻科疾患 1 名、発熱・倦怠感 1 名、頭痛 1 名であった。外傷は、1 日以上別のメニューが必要であった怪我として腰椎横突起骨折 1 件、ヒップポインター 1 件、ハムストリング腱炎 1 件、下腿部挫傷 2 件、ヒラメ筋肉離れ 1 件、足関節内側側副靭帯損傷 1 件であった。活動期間中のケアの総人数は 389 件、そのうち治療目的のケア 195 件(約 50%)、コンディショニング目的のケア 194 件(約 50%)、1 日平均 11.7 人(治療 5.4 人、コンディショニング 5.4 人)、試合前日ケア平均人数 9.3 人、試合翌日ケア平均人数 14.0 人であった。ケア部位の内訳は大腿部 31.4%、足関節 18.0%、腰部 16.5%、膝関節 13.9%、股関節 8.2%、下腿 2.6%、上肢 2.1%、肩関節 1.5%、頸部

1.0%、であった。<症例>平成 30 年 5 月 20 日の事前キャンプ数日前に所属クラブでのトレーニング中にチーム内の選手と接触し受傷、大腿部外傷性血腫と診断される。受傷約数日後の 5 月 20 日可動域制限、皮下出血、跛行強く帯同ドクターおよび提携医療機関での高気圧酸素療法、ウロキナーゼ投与、穿刺を試みるも大きな改善せず受傷 1 週間後の 5 月 20 日に可動域 80°の時点でトレーナーによる施術での可動域訓練を指示される。帯同トレーナーによる温熱療法、積極的な手技療法を行い 5 月 24 日膝屈曲 110°、5 月 29 日 130°、5 月 31 日 140°となりほぼ左右差消失した。別メニューでの調整、保護パッドなどを並行し行い合流、6 月 8 日の国際親善試合に出場した。

## 【考察】

47 日間という長丁場のキャンプは選手本人はもとより日本国民よりの期待も大きく選手達のプレッシャーは相当大きかったと考えられる。また直前まで所属クラブでのリーグ戦を行っていたこともあり怪我を抱えた状態で召集される選手が多かった中、心身ともにコンディションのばらつきが非常に大きく、本大会までにいかに良い状態で臨ませるかという事がメディカルチームとしての大きな課題であった。整形外科、内科ドクター、コンディショニングコーチとアスレティックトレーナーが様々な指標を使い、相互の信頼関係と尊重により密接に連携して職務に当たり異なるコンディションの選手に対して個別の対応を行うことで本大会においては全員がトップコンディションで試合に臨むことが出来た。メディカルスタッフとして柔道整復師がスポーツ現場にかかわる際には異なる専門職のスタッフとどれだけ力を合わせて現場の力になれるかという事が重要であり、また医師の指示があった場合に施術で結果を出すことが出来るよう日々研鑽を積むことが大切だと思われる。